

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



小説 黒井弘騎

挿絵 あめいすめる

第六章	第五章	第四章	第三章	第二章	第一章	序章
覚醒	華燭	再会	犬奴	乳奉	転変	

登場人物紹介

Characters



シスフィーナ

銀髪のハイエルフ。高潔で誇り高い性格だが、不器用で素直になれない一面も持つ。生き別れの弟をさらった教団を追っていたが、囚われの身となってしまう。

ユリアーノ

シスフィーナの弟。姉思いなハイエルフの少年。

ルシェル

ユリアーノと瓜二つの外見を持つ魔神。優しく純粋な性格の持ち主だが、強大な力を持っている。

レゼリア

真聖カルアノス教団最高幹部の一人。強力な魔神を下僕として使役する邪悪な魔女。

オセ

レゼリアの使い魔。生物の肉体を一時的に作り変える能力を持つ。

これまでのあらすじ

探求の旅を続ける銀髪のハイエルフ——シスファイナ。

愛弟ユリアーノを取り戻すため、彼をさらった真聖カルアノス教団の幹部・永遠のレゼリアと対決したシスファイナだったが、敵の強大な魔力に敗れ、囚われてしまう。

旅の途中で出会い契約した、弟と瓜二つの魔神・ルシエルとともに鬪られる女エルフ。彼女は心通わせつつあったルシエルの前で痴態を晒し者にされ、よがり狂わされて恥辱の絶頂を迎えさせられる。

さらには、心底に秘めたユリアーノへの倒錯的な愛情を逆用されて責められるシスファイナ。羞恥と肉棒と白濁の淫熱に子宮を焼き焦がされ、ハイエルフの理性が軋みをあげるのだった……。

いやらしい笑みを浮かべながら愉しげに語るレゼリア。咄嗟に反論しようとしたシスフイーナだったが、左胸を襲う快感に声を途切れさせてしまった。

執拗に乳房を可愛がる指使いは、同性の弱みを知り尽くした熟達したものだった。そして、見る者を楽しませるために誂あつらえられたメイド服には、与えられる衝撃を緩和する役目などないのだ。それどころか、乳肌に密着するラバー生地の子すべすべした触感が、快みな心地よさとなっておっぱいを蕩かせてくる。背後から僅かに揉み込まれただけで、小ぶりな乳首は早くも勃起しかけていた。きついドレスの裏生地に勃起乳頭が擦れてしまい、思わず腰を引いて身悶えるシスフイーナ。瞬間、メイド服に浮き出した肉芽を指先で抓つままれ、鋭い快感が乳芯を駆け巡った。

「くっ、ああっ！」

陰湿な手口で左胸を責められ、シスフイーナは短い嗚咽を漏らした。かつての調教で快感に脆くなった女体は、久方ぶりに宿敵の手で罵られることに、どうしようもない悦びを感じてしまっているのだ。しかも、悪いのはそれだけではない。

搾乳による搔痒感だけでなく、おっぱいの奥が切なく疼いてきている——乳房の内側から何かが這い出してくるような、いままで感じたことのない高揚感が胸の中で渦巻いていた。どろどろした快感の塊が、勃起乳首へ向けて身体の内側から登り上がってくる。

「ふふ、乳首がピクピクしてきたわ……ねえ、何か溢れてきちゃいそうでしょ？ あなた、

もう立派なママだもんね。ぱんぱんに張ったおっぱいから、ミルク出したいんでしょお？」
初めて味わう浮揚感に震える奴隷メイドに、魔少女はいやに優しい口調で語りかけた。
嘲弄の言葉に、ハイエルフの長耳がびくん、と揺れる。

「な、バカな……何を言っている!? そ、そんなこと、嘘……あ、あふうっ！」

揉まれるたび、どろどろした熱感はいっそう強まっていく。司教の言葉を、シスフィーナは否定することができなかった。

自分の乳内で起きている異変——内側に溜め込まれた何かが漏れ出してきた、いまにも噴出してしまいそうなこの浮揚感の正体は、レゼリアが言うとおり——。

——これ……まさか!? わ、わたしの胸……母乳を！

魔神の胎児を孕んだことで、ハイエルフの女体は、赤子を育てる準備に入ってしまったのだ。張り詰めた乳房の内側には、大量の母乳が蓄えられている。敏感な射乳口を、こんな風に甘く刺激され続けてしまったら、すぐに——！

「う……だめ……！ な、何か……くうう、出てくる……っ！」

じゅわ……り。しこった乳首から、とろとろした粘性の液体が漏れ出した。赤子の甘噛みにも似た乳首責めに反応し、内側に溜め込んでいた母乳を漏らしてしまったのだ。もつとも、ハイエルフの胸はまだ射乳要求に完全に応じてはおらず、ほんの少しのミルクが先っちょから漏れたただけだ。ラバー質な外見にもかかわらず透過性が高いのか、メイド服の



黒生地からは乳液が漏出し、周囲にほんのりと甘い乳匂を香らせていた。

「うふふ、出てきた出てきた。おいしそうなエルフのミルク♪ さ、同胞諸兄には、この生搾りのおっぱいをおすそ分けするわ。どう？ やっぱり良質なミルクを搾るには、活きのいい牝牛のほうが都合がいいでしょう？」

——な!? こ、こいつ……どこまでわたしを辱めれば!

あまりに下卑た企みに、反吐へどが出そうになる。この魔女は、自分を下女でさえなく、ただの家畜だと言っているのだ。そして、大勢が見ているこの場で母乳を搾り取って、外道どもに飲料として振る舞うと言っているのだ。切れ長の瞳が、屈辱に揺らいだ。

「なるほど、そのような算段だったとは。さすがはレゼリア殿、素晴らしい趣向だ」

「確かに、乳を搾るには活きのよい牝牛に限りますな。いやはや、これは私どもの浅慮でした。まったく面目ない」

魅力的な出し物に、司教たちは喜んで合いの手を打った。メイド服の美女が晒す破廉恥な搾乳ショーに、外道どもの嘲笑と欲情の視線が注がれる。

「つというわけでえ、ふふふ! あなたのママミルク、たっぷり搾り取らせてもらうわねえ……ほおら、こうやってモミモミされると、たまらなく切ないでしょう♪」

「な、そんな……いや! だ、誰が母乳なんか出す……くああッ、ま、また漏れ……!」
憤るシスフィーナだったが、意志に反して女体は従順すぎた。執拗な乳首搾りに、思わ

ず甘い嬌声を零してしまう。掌全体でおっぱいを揉まれつつ、乳首へ向けてぎゅう、ぎゅうと刺激されると、またしてもミルクが漏れてきてしまった。濡れたラバー生地との接触感が乳頭をぬるりと刺激し、さらなる悦楽を喚起する。メイドエルフは抵抗の声を上げることすらできず、搾乳責めの快感にカチューシャを震わせた。

「うーん、感度はいいけど、ちよっと出が悪いかしらね。お客様はこんなにいらつしやるもの、もっとドバドバ出してもらわないと困るのよね……オセ、少し手伝いなさい」

「はは……了解いたしました、偉大なるマスター・レゼリア」

背後からエルフを廻り続ける主の命令により、豹頭魔神は再び異能の力を放った。乳搾りに悶える奴隷メイドに変成魔法が浴びせられ、その肉体にさらなる変化をもたらす。

「く……貴様らあ！こ、これ以上、一体何をする……ふあ、あああ!？」

どくん！どくどくん！魔神の力を受け、凄まじい熱さが胸内で迸った。強烈な違和感と同時に、両の乳房が急激に圧迫感を増す。ただでさえ窮屈なメイド服に締め上げられていた胸乳が、さらにきつく押し潰される感じ——乳悦で感度を増したせいで、衣服の締めつけをより鋭敏に感じてしまっているということもあるだろう。だが、どんどん窮屈さを増す圧迫感は、そんな感覚的なものでは済まされなかった。

——そ、そんな!? わたしの胸……お、大きくなっている……!？」

乳房に起きている変化に、シスフィーナは目を剥いた。やはり、胸が苦しいのは気のせ

いなどではない——両の乳房が、物理的にどんどん膨らんできているのだ。乳球は見る間に大きくなり、きつい胸生地を押し広げる。スレンダーな身体つきに相応しかつた麗乳は、むちむちと美肉を実らせた豊潤すぎる巨峰へと変化していた。いままでの倍近くにまで膨れ上がった乳肉鞠は、たつぷりと果肉を詰め込んだ完熟の大玉メロンを思わせる。

「くはあう、く、きつ……ううッ！」

巨大化した乳峰を、窮屈な胸生地が締め上げる。ただでさえきつい作りだったメイド服は、膨乳肉によつて内側からばんばんに押し広げられていた。カット部分から覗く胸の谷間は、開いている部分からせり出そうと互いに胸肉を押しつけあい、むにゅむにゅと撓たねんで煽情的な肉の舞を見せている。勃起しきつた乳首は黒生地にこんもりと浮き出し、肥大化した乳輪の陰影までをもしやらしく浮き上がらせていた。黒ラバーに包まれた肉豆は、滲み出した母乳でうつつすらと照りを増し、濡れた黒真珠のように艶やかな輝きを放っている。膨れきつた乳肉はいかにも柔らかそうで、見ているだけでも欲情をそそる豊麗さだ。

オセの魔力によつて、ハイエルフの麗乳は、豊満すぎる淫らな巨乳へと変えられていた。揉み甲斐を増した豊肉乳を、レゼリアの細指がぎゅう、ぎゅうと揉みしだく。

「い、やあ……つくふう！　こんな……くふつ、あああつ！」

司教の細指に揉み責められての乳悦と、窮屈さを増す胸の締め上げ、そして自分の肉体をいいように改造された屈辱に、巨乳メイドは引き攣ぜんめいったような喘鳴を上げた。奴隷エル

フが身じろぐたび、むちむちに熟れきった巨美乳がたふんだふんと煽情的に揺れる。

「ほお、これはまた見事に膨らんだものじゃな……まさに乳牛そのものじゃ！」

「さしずめ、乳を搾るためだけに品種改良を続けた薄汚い家畜といった趣。我らに魔力を捧げるだけのハイエルフになんとも似合いの姿よ……さぞ美味しい乳を出すのだろうなあ」

男たちは、巨乳化改造のメイドを口々に嘲弄した。同時に、淫らに踊る巨乳の迫力に、熱い視線が送られる。数多の欲情と悪意が、豊満すぎる胸乳に遠慮なく注がれていた。

——く、くうううう……！　そ、そんなこと……！

人を人とも思わぬ下衆どもの一言一言が、ハイエルフの羞恥をさらに煽り立てる。端正な美貌を赤らめ、シスフィーナは恥辱に唇を噛み締めた。

「くううう……げ、下衆があ。貴様ら、どこまで他人を辱めれば……」

「うーん、とりあえずはあなたの巨乳ミルクで全員が喉を潤すまでかしらねえ？」

ぐにゆうう！　恥辱を噛み殺して悪態をつくメイドエルフだったが、レゼリアの搾乳によつて言葉途切れさせた。豊満すぎる乳房に比してあまりに小さな指が、柔らかな膨肉に容赦なくめり込んでいく。

「あつ……あつはあああ!?　くひい、あつひああああー！」

豊満巨乳を揉まれた瞬間、奴隷エルフは喉を仰け反らせてあさましい嬌声を上げた。力任せに細指をめり込まされたおっぱいから、いままでの搾乳とは比較にならないほどの快

悦が湧き上がる。性感帯を直接弄られているかのような怒濤の愉悅に、心臓が爆発しそうに高鳴っていた。魔神の異能によって改造された巨乳は、大きさだけでなく、敏感さまでも数倍に増加させられていたのだ。

鋭敏すぎる快楽受容器と化した豊満乳を、レゼリアは激しく揉み責めた。柔らかい肉鞠に張力限界まで指を埋めながら、親指と人差し指で乳輪をくりくりと可愛がる。生地を押し上げている乳首は切なそうに震え、快感に應じて甘い白蜜を漏らしていた。まるで、甘果実を握り潰して果汁を搾り取っているかのようなようだ。搾り取られた乳液に代わり、快感という名の見えない毒が巨乳に詰め込まれていく。

——こ、この胸……なんてあさましいの！ 母乳まで出して、感じてるなんて……！

窮屈すぎるメイド服の生地は自身の恥乳で濡れそぼり、開きかけた乳腺にまでびっちり吸いついていた。小山のように盛り上がっている勃起豆の根元を刺激されると、濡れ生地と乳孔がぬるぬると擦れあって甘い乳悦を感じてしまう。レゼリアが指を動かすたび、乳首の先から白汁が滲み出してラバー生地から漏出した。

「はあ、はあああ……つくああ！ こ、こんな、バカなあっ……ひ、くううううう！」

「あらあら、ミルク漏らしながら甘い声で泣いちゃって……なんてエッチなおっぱいなのかしら！ うふふふ、メチャクチャに虐めてあげたくなっちゃうじゃない！」

敏感果実のあまりに淫らな反応に、責め手自身も興奮しているのだろう。はあ、と濡れ

た吐息を漏らしながら、レゼリアは人差し指と親指を乳輪から乳首へと移動させた。

——だ、だめ……そこ……！

ゆっくりと移動していく指の動きに、シスフィーナは怯えを隠せなかった。感度を増しているのは、当然乳房だけではない。ただでさえ敏感すぎる性感帯である乳首は、これまでの乳戯でもウロコリにしこりきって興奮しまくっている。勃起乳首は、押しつけられたメイド服の摩擦だけで、いまずぐにでも何かを噴出してしまいたいようになっていたのだ。怖いくらいに敏感なそこを、このまま抓まれてもしたら、もう——！

「く、くううう……あつ!? くああ、あふああああああ！」

ぎちゅり！ 濡れた生地を押し潰す淫音とともに、少女の指が乳豆を思い切り抓み潰した。瞬間、痛みにも似た凄まじいまでの虐待が乳芯を駆け巡る。

「はぎいいいい！ くはあ、はひ、いっひいいいいい——！」

勃起したクリトリスを同じように抓まれても、これほど激しい痛悦は感じまい。陰核以上の弱点に改造された乳豆を責め立てられ、エルフの意識は一瞬消し飛んだ。

快樂という名の稲妻が神経をショートさせ、脳髓を一気に焼き尽くす。全身にまで飛散した悦虐に応じ、ミニスカートの下の秘花から愛液が流れ出した。恥液に濡れた太ももをガクガクと痙攣させ、シスフィーナは未曾有の乳悦に悶え狂う。

「はひいい！ あつはああ、すご……くあああ！ ち、乳首い……あ、あふああ〜！」

「ははは、なんだねその様は……所詮口でどう言い繕っても、実体はあさましい牝牛か！」
気丈な態度を保っていられず、シスフィーナは銀髪を振り乱して絶叫した。気位の高いハイエルフとは思えない乱れ様に、観衆から冷ややかな嘲笑が飛ぶ。恥辱が心を焼くが、勃起乳首から叩き込まれる電撃の前には、そんなことに構ってられる余裕はなかった。

「すごいよがりようね……面白いわあ！ ほらほら、もつと虐めてあげる……うふふふ！」
「そ、そんな……いやあ！ も、乳首は……くあああ、つくひいいい——！」

こりっ、こりこりこり！ サディスティックな哄笑を上げながら、レゼリアは勃起肉豆を何度も何度も扱きまくる。時には優しく指の腹で肉豆を撫で上げ、また爪の先できつく抓み上げて虐め続けた。まるで毒蛇のような執念で、敏感すぎる乳頭を何度も何度もねちっこく可愛がられる。粘乳まみれになってしまった乳腺の窪みをぬるりと擦り上げられた瞬間、あまりの快感にシスフィーナのおっぱいが弾け蕩けた。

「ふああああ、だめっ……で、出る！ 何かっ、でっ、出ちゃううう！」

どびゅ、どびゅびゅびゅびゅるうう！ ピンピンに勃起していた乳首から、まるで滝のように大量の母乳が噴出した。乳腺という蛇口を快楽で無理矢理にこじ開けられ、溜め込まれていたミルクが怒濤の勢いで迸る。射乳液はドレス生地を浸透して噴き上がり、アイチを描いて会場内に白い虹をかけた。

「はあっ、ひいつ、くう！ そんなあ、ま、まだ出てる……くああ、はっひいいい！」

母乳を噴出する巨胸を淫猥に揺らし、シスフィーナはあられもない声で悶え狂った。乳液と一緒に、気丈な抵抗心まで蕩けてしまったかのようだ。内側からの射出液に乳腺を擦られる凄まじいまでの切なさに、思考までもがミルク色に染まってしまふ。母乳を噴き出すのが、たまらないほど気持ちよくて、オルガスムスにも似た飛翔感が止まらない——！

——そ、そんな……あ！ 母乳を出すのが、こんなに気持ちいいなんて……嘘……！

人生で最初の噴乳とはいえ、ただ乳を搾られ吐き出すだけの行為に、これほどの悦びを感じるはずがない。シスフィーナは止まることなくミルクを噴き出すおっぱいを揺すり、乳粘膜を擦られる至悦に惑乱した。

だが同時に、彼女にとつて、身体から何かを吐き出す悦楽は、馴染みのないものではなかった。魂までもも搾り出されるような射出感、まるで——。

「シスフィーナ嬢、それはこのオセよりの心ばかりのサービスでございます」

悦びと恥辱に惑乱する妖精に、肉体改造の張本人が慇懃な言葉使いで説明する。

「あなたもこのパーティを楽しめるようにと、乳を噴き出す瞬間、男性の射精と同様の感覚を味わえるよう手を施しておきました。弟君に自身を投影して快楽を貪っていた貴女には馴染みの感覚かと存じますが……よろしければいま一度、牡の絶頂をご堪能ください」

「そ、そんな……ひううう！ や、やつぱり、これは……はあっ、くひいいいっ！」

白く濡れたコスチュームに浮かび上がった乳首は、いまだにビクビクと動いておっぱい

を垂れ流している。オルガスムスにも似た射乳の感覚に耽溺しつつ、シスフィーナは快楽混じりの絶望に喘いだ。

——そ、そんな……あ！ お、おっぱい出しながら、イカされるなんて……！

かつて生やされた擬似男根で味わわれた倒錯の快楽——あさましすぎる改造巨乳は、ミルクを搾り出されるたび、男の射精と同じ感覚を食うのだ。しかも、魔神によって作り上げられた快楽器官は男性器とは違い、いくら汁を吐き出そうが決して萎えることがない。擬似射精根ともいえる改造乳首は、ひとしきり乳液を吹き零した後も依然勃起したままで、次なる射乳を待ち望んで屹立していた。そして、豊満すぎる淫峰の内側には、乳腺粘膜を刺激する快楽母乳がたっぷりと蓄えられているのだ——。

「さあ皆様方、ハイエルフの魔力の詰まったママミルク、好きなかだけ堪能なさってくださいな！ 量のことなら心配しないで、まだまだたっぷりとあるんだからあ！」

「おおつ、ありがたい！ それでは、お言葉に甘えるとしますかな！」

ホストの提言に、賓客は歓喜の声を上げた。エプロンを揺らして悶えるメイドの前に、一人の司教が歩みを進める。白乳で濡れた胸元へ、空のワイングラスが差し出された。この司教が魔力を付加したのだろう、グラスの縁は、魔法の光で刃のように輝いている。

「ミルクを注ぐのに、その衣服は少々邪魔ですな。レゼリア殿、お手をお退けください」

シユパアッ！ 優雅な仕草で、男は杯を横に振った。鋭刃の輝きが、勃起乳首の先端を

一瞬だけ掠める。瞬間、肉豆状に盛り上がっているドレスの先端だけが、僅かに切断された。魔法のグラスで衣服を切られ、切れ目から白い裸乳が晒される。

「は、っひいいいいいんッ……！」

頤を反らし、痙攣性の嬌声を上げるシスフィーナ。新雪と肉とが混じり合ったようなピンク色の肉豆が、黒生地 of 切れ目から左右同時に突出した。充血した乳首に、外気の冷たさが突き刺さる。ドレス生地に乳首の側面を擦り上げられ、破廉恥な爽快感とともに鋭い快感が迸った。剥き出された二本の肉豆は痛ましく勃起し、先端を乳汁で濡らしている。

「へええ、さすがはローカム卿、見事なお手前ね。それじゃ、お酌してあげるわねえ♪」
「あ、いやあ……つく！ はあ、ふうううっ！」

左の肉豆に、再びレゼリアの指が食い込まれる。守るものなく晒された性感帯を直接弄られ、胸を仰げ反らせて身悶える巨乳メイド。ぶるるんっ、と大きく揺れた左右の胸房に、何人かの司教が手を伸ばした。

「お待ちくださいレゼリア殿。貴女だけに乳搾りをさせるわけにも参りませぬ。我輩も、搾乳の手伝いをさせて頂きますぞ」

「そのとおりです。空いておる右乳房の搾乳は、私どもにお任せください」

「いやいや、肥え太った乳牛のように馬鹿でかい乳房を搾るのは、麗しいレゼリア殿には重労働じゃろう。わしも、左乳を揉み解すお手伝いをさせて頂くわい」

邪教の司教たちは、口々に助勢を申し出た。みな態度こそ紳士的だが、実際にはエルフを責め鬨り楽しむ腹積もりだ。欲情に滾る視線と笑みが、外道の本音を語っている。

「ああ、お優しい方ばかりで、本当助かるわあ！ それじゃあ皆様、悪いけれど頼むわねえ。左右同時に揉みまくって、どんどんミルクを搾り出してやってくださいなあ♪」

「な……あ、あ……！」

乳虐のメイドは潤んだ瞳を震わせ、その会話内容に戦慄した。レゼリアに責められている左乳房だけでなく、同様に肥大化されて敏感になっている右の乳房にも、それぞれ数本の腕が同時に伸びてくる。

——い、いや……だめえっ！ こんな大勢に、両方一緒に責められるなんて……！

レゼリア一人に乳首を扱かれて母乳を搾られているだけでも、あまりの快感でどうにかなくなってしまいそうなのだ。そのうえ、こんな大勢の男たちに搾乳され、両胸一緒に射乳絶頂を味わわされたら、一体どうなってしまうのか——狂おしき乳悦の予感に、たらりと新たな恥蜜が流れてガーターを濡らした。

「ふふ、それでは失礼するよシスフィーナ君。おやどうしたね、怯えているのかね？」

「何、心配せずに我輩に任せたまえ。大丈夫、女の扱いには慣れてるつもりだよ！」

空いている右乳房に、いくつもの手が伸びた。無骨な掌に乳房を驚掴まれ、ドレスの破れ目から勃起している乳首を抓まれる。メロンほどもある巨大乳果は、三人分の掌をもつ

てしても包みきれず、十五本の指による同時搾乳を受けることになってしまった。豊満乳房をむぎゆ、むぎゆうと一斉に搾られ、内部に溜まった母乳が搾り出されてしまう。

「ひ、や……くああ！ あああああ……つああ！」

排出される乳液の迸りに内粘膜を擦られ、切ない乳悦が駆け抜ける。いままでノータッチだった右乳房にまで倒錯した悦びを詰め込まれ、搾乳メイドはカチューシャを揺らしてよがり啼いた。高貴な顔立ちは、恥ずかしさと気持ちよさに艶かしく紅潮している。

「ほほっ、なんともそそる悶えぶりじゃ。どれ、こちらも一緒に可愛がってやるかの」

「それではレゼリア殿、貴女には乳首をお願いする。我々は、乳房を揉ませて頂くよ」

「ええ、どうぞお。よかつたわねシスフィーナあ、みんなと一緒に揉んでくれるって！」

左の乳房にも、他の司教の腕が迫っていく。レゼリアに乳首を扱かれているだけでもまたイキそうになっている敏感乳に、二組十本の指がめり込まされた。

「くああ、いや、やあつ！ ち、近づくな……そっち、これ以上は……はひいいッ!？」

必死で意気を振り絞り、シスフィーナは気丈に抵抗を示した。だが、左乳で炸裂した肉愉に、口先だけの抵抗は一瞬で封じられてしまう。一度射乳快楽を味わってしまった左乳房は、絶頂後の性器のようにさらに敏感さを増していたのだ。触られるだけでも辛い快楽器官を、二人がかりで容赦なく揉みしだかれる。燻^{くすぶ}っていた快感はすぐさま倍増し、巨大乳房をいままで以上に熱く蕩かせていった。絶頂射乳のミルクに濡れそぼった乳首が、び

くん、ぴくんと淫らに痙攣して乳腺を開いていく。

「ほおらシスフィーナあ、みんなに揉んで頂けてるんだから……早く期待に応えなさいよ!」

「かはっ、くひい! ち、乳首……そんな、強く……っうううう〜!」

しゅっ、しゅっしゅっ! 暗黒司教は、まるで男根を抜くかのような手つきで肉豆を擦り上げた。残乳をこびりつかせた乳粘膜が擦れあい、胸の芯まで切なさで痺れてくる。いった後の男根を扱かれるのにも似た辛い愉悦に、奴隷メイドは細腰をくねらせ悶え狂った。

——だめ……だめっ! こんな……気持ちよすぎて、溶けてしまいそう……!

何本もの指で乳房を揉まれながら、執拗に急所を可愛がられる。左右同時に揉み責められて、いままでの倍以上の乳悦が脳裏を焼いた。外道の玩具として肉体を作り替えられ、淫らな肉に容赦なく叩き込まれる快感の連続に、抵抗心が溶かされていく。吐き出される息は熱くなり、気丈な瞳はいつしか快楽の涙に濡れていた。

「い、いやっ……いや! も、だ、出したくない……搾るな……あ、あああ……!」

「はあ? あなた、自分の立場わかってるの? あなたはいま、母乳を出すためだけに生かされてる家畜なのよ、か・ち・く。わかったら、とつととミルク噴きなさい、乳牛エルフ!」

耳を塞ぎたくなるような罵詈雑言とともに、再び乳首に爪が食い込まされた。痛みを伴うマゾヒスティックな悦びが乳管内を駆け巡り、またしても射精絶頂にも似た激感が湧き上が



つてくる。どぶつ、と大量の粘乳が、乳腺を上ってきた。

「そんな……はひい、くううう！ はあああつ……ま、また出てくるっ！」

どっば、どばびしゃあああ！ 細指による一搾りで、左巨乳は再び決壊した。輸精管を擦り上げられるのと同等の絶頂感が、何本もの乳腺で同時に炸裂する。

——くひい、ひい、い……！ こ、こんな……くうう、す、すごすぎる……！

男のオルガスムスに匹敵する快感を立て続けに味わわされ、シスフィーナは息を荒げて悩乱した。勃起乳首から大量の白乳が噴出し、掲げられたグラスを満たしていく。杯を満たした後も、快楽汁は乳管内で糸を引き、その粘感さえもが奴隷メイドを悶えさせる。ハイエルフの太ももは、漏らされた恥涎でべっちよりと濡れてしまっていた。美脚を彩るガーターとストッキングは、汗と愛液で恥ずかしい染みを作っている。

「ふん……乳を搾られて濡らしているのか、あさましい牝牛が。さて、かように淫乱な乳牛エルフの一番搾り……果たしてどんな味がするのか、味見してやろう」

「く、くはつ……！ はうううッ、いや……！」

気位の高いハイエルフに見せつけるように、司教はグラスに満たされた液体をゆっくり飲み干した。生命を育むための母液を嗜好品としてテイステイングされ、麗女の心が軋みを上げる。だが、その乳を外道に提供したのは、紛れもなく自分自身なのだ。背徳感と敗北感に同時に苛まれ、シスフィーナは恥ずかしげに長耳を震わせた。

「甘い。それに、ぬるぬるとして粘り気のある喉越し……総じていやらしい、下卑た味わいといえる。だが、これはこれで野趣があるな。ふむ、四ツ星をくれてやろう」

「へえ、美食家のローカム卿にそこまで言ってもらえるなんて、光栄に思いなさいよシスフィーナ。さあみなさん、これで味は保証済み。どうぞ、遠慮なく召し上がって頂戴！」

その言葉に、男たちはおお、と感嘆の声を上げた。自分も四ツ星乳飲料を味わおうと、どの司教もこぞって乳を揉みしだき、搾乳奴隷を射乳絶頂へ導こうとする。

「はくうっ、いい、ひいいい……っ！ い、いや……も、これ以上、搾るな……」

「何を言っているのかね、まだ右は出してもいないじゃあないか。みな、君のミルクを所望しているのだよ。さあ、どんどん搾らせてもらおうよ」

「まったくじゃ。それに、揉み心地もいいからの……たっぷり楽しませてもらおうわい」

射乳液を飲まれている間も、右乳房への攻撃は少しも休まっていなかった。噴き出す汗でじっとり濡れたラバー生地は、何本もの指が深い皺を刻む。一人の司教が乳山のふもとを包囲するように圧搾し、他の掌が張り詰めた乳峰をぎゅうぎゅうと搾った。ポンプのように根元から搾り出された母乳が、急速度で乳腺粘膜を刺激していく。敏感な出口をこりこりつと扱き上げられた瞬間、昇り上がってきた母乳が勢いよく噴出した。

「くう、そんな搾られたら……だめ、出るう！ み、右も……くあぁ、出ちゃううッ！」

どびゅ、どびゅびゅうううう！ 外道たちの巧みな連携により、右乳も射乳絶頂に陥落

した。乳管を搾られる切なさと同時に、辛さを伴う牡の射精感におっぱいを支配される。ミルクに濡れた乳豆を震わせ、恍惚の声を上げる搾乳メイド。噴出した快樂乳は待ち構えていたグラスに注がれ、またしても司教の喉を潤すことになる。

「おおっ、確かにこれは絶品！ 癖になるな、一杯と言わず何杯でもいけそうですぞ！」

「ぬう、わたくしも早く試してみたいものです。では、ペースを上げていくとしよう！」

「あ……かはあ、あ、あ……！ そ、そんな……もう、やめて……」

白銀のポニーテールを力なく振り、奴隷メイドは涙声で哀願する。外道どもに懇願するなど、あまりに屈辱だ。だがシスフィーナは、それ以上に、自分の身体が味わっている快樂に怯えていた。両胸とも射乳快感に屈してしまっただけ、敏感巨乳はもはや愉悅に抗うことをやめている。ミルクを搾られるたびに極めさせられてしまう絶頂感に、ハイエルフは恐怖にも似た悩乱を感じていた。

奴隷メイドの懇願など無視し、司教たちは休むことなく両乳房を嬲り続けた。膨張した巨乳は容赦なくこねくり回され、柔らかくも淫らに姿を変える。揉み潰される両乳房は互いの肉を押しつけあい、メイド服の隙間で谷間をぶつけあつて淫らに蠢いていた。

——こんな……だめ、だめえ！ も、我慢できない……また、溢れちゃううう……！

火照りきつたおっぱいをきつく責められ、絶頂中のペニスも抜かれているような辛い快感が迸る。左右同時に搾乳され、先端からは休む間もなくミルクが漏れ続けていた。間断

なく続く男の絶頂感に、もはや正気を保つことさえ難しい。根元から乳房、そして発射口まで揉み廻られる集団搾乳によって、メイドエルフは休むことなく射乳を強制されていた。乳腺を開ききった乳首を左右同時に扱き抜かれ、両の乳首が同時に爆発する。

「はあつ、またあ！ で、出る……そんなつ、両方とも、出ちゃううううー！」

じゅぶぶう！ どつばばああ！ これで四度目になる噴乳快楽は、左右同時に訪れた。一回だけでも感じすぎる牡の射精感が、二本の乳首で同時に炸裂する。男たちの掌に包囲された巨乳をぶるぶると揺らし、シスフィーナは快楽の声を上げミルクを噴いた。

だが、メイド服を揉みくちやにする男たちの搾乳責めは、メイドがどれだけ乳を出しても一向に休まらない。誰かがグラスミルクを飲むために手を離しても、その瞬間に他の司教が新たな掌を伸ばし、乳房を間断なく揉んでくるのだ。射乳のたび法悦に溺れ、そして抵抗力を減じていくおっぱいは、常に一定量の母乳を供給した。奴隷メイドの巨乳は、男たちの掌で責められ続け、常に絶頂状態を強制されてしまっている。

「はあ、はああん……ひやう！ も、もういやあ……おっぱい、もお、これ以上はあ……」
涎を吐き散らしながら、乳虐のハイエルフは弱々しく懇願した。だが、ただミルクを振る舞うためだけに改造された奴隷エルフの言葉になど、なんの効力もありはしない。外道どもに延々と乳を責められ、母乳が尽きるまで男の絶頂感を味わわされる――。

「かはあ、あ、あああああ！ いやああ、また、また出る……うううー！」

どば、どつばばばばあ……。左右の乳首から搾り出される母乳は、代わる代わる差し出されるグラスを次々に満たしていく。だが、巨大に変造された膨乳とはいえ、さすがに限界があった。噴き出す母乳には徐々に勢いがなくなり、司教に振る舞われる酌のペースが衰えていく。もつとも、それでシスフィーナの感じる悦楽が減じるわけではない。思い切り搾り出されてのオルガスムスこそ訪れないが、敏感な乳腺を流動液に擦られる搔痒感が常に充滿し、気が狂うほどの切なさがおっぱいを蕩かせるのだ。拷問じみた連続快楽に繋ぎとめられ、シスフィーナはぶるぶると小顔を震わせて悩乱するしかなかった。

「あららあん、これはいけないわね。ちよつと出が悪くなってきたみたい……。オセ！」
「はは、了解いたしました……。それでは、次はこれで」

豹魔神の変成魔力が、再びシスフィーナに注がれた。内股気味で悶えているメイドエルフの肢体を、不可視の魔力が包み込んでいく。

——う、あ……。？ そんな、ま、また……。あ!? こ、今度は、一体、何を……!!

またしても肉体を改造されてしまった——い以上の虐悦の予感に戦慄く搾乳メイド。瞬間、じよろじよろと流れる母乳に擦られる乳首が、急激に熱さを増した。次の瞬間、いまままでとは比較にならないほどの量のミルクが、一気に漏れ出してくる。

「え、あ、あ……。かはあああつ!? くひい、な、何これ……。はあ、っひいひいひい〜!」
どつばあ、どばどばどばあ! 凄まじい母乳の奔流が、滝のように噴出した。その勢い、

そして量は、いままでの比ではない。見えない魔力により、なんと乳首内部の乳腺が、内容物を吐き出しやすいように大きく広げられていたのだ。拡張された乳孔から、一気に大量のミルクを搾り出される。それは即ち、噴乳エルフが一度に味わう射精快感も増加したということだった。

「はおおおつ、出るつ、で、出てるううう！ ひああ、と、止まらない……かはあ、す、すごいっ！ いや、いやああ、乳首があつ、乳首がいつてるううう！」

予想を超えた狂悦に、シスフィーナは狂ったように泣き叫んだ。拡張された乳首からぶじゃあ、ぶじゃあつと大量のミルクが噴き出し、射乳量に比例した破滅的な絶頂感が炸裂する。両方の乳首から母乳を噴出し、股間からは愛液を垂れ流しながら、シスフィーナは止まることのないオルガスムスに乱れ狂った。

「おほほほつ、まるで滝のような勢いですなあ……これは美味そうだ！ どおれ、我輩は直接飲ませてもらいましょうかな！」

と、豚のように太った司教が、右乳首に向けてグラスではなく顔を突き出した。猛烈な射乳で揺れている蛇口を注視し、べろり、と下品に舌なめずりする。

「うあ、あはあつ!? そ、そんな……やめっ！」

ぴくん！ 左胸を襲った新たな肉悦に、シスフィーナは大きく背中を仰け反らせた。でっぷりと肉をつけた太唇に、勃起乳頭が一口で呑み込まれる。太い唇で乳輪を締めつけら

「はあ、はあ、はあっ！ ふあああ、まだ、う、動いて……つくひいいい！」

牝犬奴隷が絶頂しても、ご主人様には関係なかった。むしろいっそうストロークを激しくし、麗女の穴藏を責めまくる。絶頂で収縮した肉壺を激しく摩擦され、シスフイーナはガクガクと全身を震わせて感じまくった。汗にまみれたメイド服が揺れ、愛蜜まみれの両太ももが痙攣する。

「はあっ、ひいっ！ お、お願い……や、休ませ……ふああ、まはあ、奥までえー！」

一度絶頂してしまったせいで、牝犬の身体はさらに敏感になってしまっていた。そこを苛烈な速射ピストンで打ち抜かれ、気が狂いそうなほどの鋭悦が連続する。追い詰められたハイエルフは普段の強気とは一転し、惨めな負け犬の声で慈悲を懇願していた。

「奴隷に拒否権なんてあるわけないだろ。貴女の仕事は、皆様方を満足させることなんだから。司教様はまだまだ満足なさってないってことだよ、もっとしっかり奉仕しなよ！」

「うああ、はあ……は、はひい。わ、わかったわ……るひえるう……んぶう！」

弱みを見せてしまった精神が、ここぞとばかりに調教される。被虐の牝犬奴隷は、もはや逆らう選択が思い浮かばなかった。戦慄く唇を必死で男根に宛がい、必死で慰める。

「はあ、はあ、ちゆむ……。はあ、くふああ……んぶう、んううう……！」

辛いほどに気持ちいい蜜穴を責め続けられ、苦痛にも似た快感に身体が悲鳴を上げていた。それでも奴隷エルフはルシエルの命令に従い、懸命にフェラチオ奉仕を続ける。あさ

ましいイキ顔のまま口淫奉仕を続ける麗女の姿は、なんとも健気で、そして卑猥だった。

「ほほう、イキながらも奉仕を続けるとは。中々奴隷が板についてきたな、感心感心……
どれ、それでは私も褒美をくれてやるとするかな！」

また褒めて頂けた——くしゃくしゃと髪の毛を撫でられ、シスフィーナは幸せそうに瞳を緩めた。瞬間、半ばまで唾えている亀頭が、大きく脈動して発射態勢に入る。

「餌をくれてやる。たっぷり味わえ！」

「ふ、ふあああ!? くふうう、うっふうううううう——！」

どば、どばばばば！ 極太亀頭から、白濁したマグマが噴出した。粘り気の強い牡液が、半開きの口内にぶち込まれる。発射の勢いでペニスが唇から外れ、射精液は麗女の顔面全体に飛散した。涙に濡れた頬や、細い鼻面にまでに白濁がこびりつく。どろりと糸を引く生搾りの熱さに、碧眼を細めて恍惚とする犬奴隷。メイド服の胸元や首輪までもが精液に汚され、床にどろどろと腐液を垂らしていた。

「シスフィーナ、舐めて綺麗にして差し上げるんだ。せつかく頂いた餌なんだ、感謝を込めて味わうんだよ？」

「んぶあああ……は、はひい。わ、わかっへる……わあ。んちゆ、ぺろお……」

言われるまでもなかった。喉の奥に入り込んできた精液は、たまらないほど魅力的な味わいなのだ。精液にまみれたイキ顔を綻ばせ、シスフィーナはぺろぺろと肉棒を舐め慰め



る。濃密な精匂が肺腑に広がり、苦く生々しい牡味が喉にこびりついた。欲情マグマの熱さに焼かれた咽喉を、どろどろと糸を引く粘感が覆っていく。

——はあっ。お、おいしい……。いやっ、し、舌が、止められないわ……。

精液の味に溺れた淫乱エルフは、一心不乱に牡ミルクを貪った。はしたなく喉が蠢くたび、尻尾と長耳が嬉しそうに揺れる。恍惚の表情で、竿や亀頭にこびりついた残滓を必死で舐め続ける犬奴隷。あさましく精液を求め続けるその姿は、あまりに卑猥で淫らだった。「満足だ牝犬、及第点をやろう。次の機会までに、いつその精進を期待するぞ」

「ふああ、あんっ……。や、もつと……。お」

綺麗になったペニスを引つ込められると、寂しさに物欲しげな声が出てしまう。遠ざかっていく亀頭に舌を伸ばし、シスフィーナは肉餌にはしたなく食いつこうとした。それが叶わないと知ると、自分の顔面にこびりついた精液の残滓までを舐め始める。後背から貫かれながら、ミルクを味わい続けるエルフの姿は、欲情に溺れきった犬そのものだった。

「シスフィーナ、行儀が悪いね。貴女は高貴なレゼリア様のペットなんだから、礼儀正しくしてくれよ。それに、餌を下さるご主人様は、まだたくさんいらっしやるじゃないか」

「え、ふあん……。ああ!？」

言われて、シスフィーナは気付いた。眼前の快樂だけに向けられ、狭窄していた視野を広げれば、何本ものペニスが自分に向けられている。そうだ、このホールにいるカルアノ

ス司教——いや、ご主人様方は、一人や二人ではないのだ。

——あ、ああ……。こんなに、たくさん……！

いままでの嬌態を見て興奮しきっているのだろう、自分に向けられたペニスのどれもが、巨大に勃起して先走りを流していた。むわつと香る男臭が、淫乱妖精をさらに惑乱させる。後背からのストロークで揺れ続けている腰上では、犬の尻尾がぱたぱたと振れていた。欲情と興奮で乳房はさらに膨張し、窮屈なラバー生地をぱんぱんに膨らませている。

発情しきった犬奴隷の前に、新たなご主人様が足を進めた。

「次は私にしてみらおうか……。喉奥まで啜え込んで、搾り取ってくれたまえ」

「は、はい……。かしこまり、ました……。つはむうう、んちゅううう！」

差し出された肉餌に、すかさずしゃぶりつく食欲牝犬。先ほどの魔根は大きすぎて先端しか舐められなかったが、今度のペニスは喉奥まで迎え入れることができた。ご主人様の期待に応えられた嬉しさに、犬の隷従心が打ち震える。

「ふむ、んぷうう……。ふぁ、お、おおひい……。ふむう。んちゅ、んちゅっ……。！」

先刻の巨大根よりは幾分常識的なサイズとはいえ、新たな魔根は、それでも十分に巨大だった。エルフの小さな口は内側から圧迫され、頬っぺたが膨らんでしまう。後背から激しく責められ続け、呼吸もままならない息苦しさの中で、シスフィーナは必死に舌を使っ
てペニスを慰めた。同時に、可能な限り顎を前後させ、喉と頬をすべて使って男根に奉仕

する。唇の隙間からちゅばちゅばと粘音が漏れ、銀のポニーテールが前後に揺れた。

「ふうむ、口は取られてしまったか。では手で……と言いたいが、その首輪のせいで手は使えないのだったな。仕方ない……セルフサービスでやらせてもらおうとしよう」

新たな司教が、エルフの銀髪に手を伸ばした。汗に濡れた毛髪を手に取ると、それに自分のペニスを包む。そして、そのまま激しく腰を振り、頭に亀頭を擦りつけてきた。

——は、ああ……か、髪まで……。わたし、髪まで、使われてる……!!

密かに誇りに思っていた、弟とまったく同じ輝く銀髪。女の命ともいえるそれを性欲処理道具として使われ、惨めな敗北感が心を焼く。だが、それと同時に、自分でも予想もできなかった愉悅が心に満ちていった。犬として、頭を撫でられることに、どうしようもない悦びを覚えてしまうのだ。激しく頭を愛撫されて、幸福な充足感が満ちていった。

「はむううん……くうん！ くうん、くうん……!!」

時折頭皮に擦れる亀頭の熱感と肉質が、たまらなく愛しい。従属の悦感が、脳にまで響き渡った。紅潮した長耳を痙攣させ、シスフィーナは犬の悦びに打ち震える。口を封じられてのくぐもった鼻声は、まるで甘えん坊の犬が上げる鳴き声のようだった。

「はは、中々可愛い声で鳴く犬ですね。どれ、僕も髪を使わせて頂きましょう」

もう一人の司教は、揺れるポニーテールに目をつけた。右手を伸ばし、ふさふさした髪房を握り締める。右手で自分のペニスを固定すると、男はそれらを擦りあわせて快感を貪

った。トレードマークの髪房を乱暴に扱われ、麗女の細顔がガクガクと揺れる。

美しいハイエルフの銀髪は、肌触りまでもが芸術的に繊細だった。きめ細かい髪の毛一本が肉竿を刺激し、素晴らしい快感を送り込んでくる。二人の司教は激しく手と腰を動かす、シスフィーナ自慢の銀髪を最高のオナペットとして楽しんだ。

「はむうう……か、髪までえ……ふむうう、うふうん……！」

先走りに濡れた亀頭に頭皮を扶られ、脳髓にまで屈辱感が染み込まれる。綺麗な銀髪を強く引つ張られると、痛みとともに求められているという充足感が満ちていった。しゅしゅと髪の毛の擦れる音が響き、だからだと流れる先走りが銀髪を汚していく。頭髪に滲む欲液は、エルフの長耳にまで垂れていった。音と粘感に犯された長耳は、切なげに震えている。

メイドのブリムを切なげに揺らしながら、シスフィーナは頭髪奉仕の幸福感に耽溺した。
——はあ、う、嬉しい……。こんなの、おかしいのに……。た、たまらない……。いい！

髪の毛をめちゃくちゃに引つ張られ、鋭い痛みが頭皮に走る。ペニスを頬張っている最中に頭を押され、内頬が擦れて口内が圧迫された。ポニーテールを上下左右に振り動かされ、頭も激しく揺らされる。それでもシスフィーナは口内の肉棒を離すことなく、情熱的に舌を使って奉仕を続けた。その間にも腰は振りたくられ、老司教の絶倫ピストンを受け入れ続けている。お口でもあそこでも肉棒に奉仕し、そして頭や髪の毛まで使って尽くし

ている——献身の被虐に、奴隷エルフはナルシスティックな陶醉感さえ覚えていた。

「んぶああ……いい、いひいい……。ご主人様のペニス……すごく、嬉しいいい……！」

随喜の涙を流しながら、鼻にかかった甘声で啼くシスフィーナ。頭部と銀髪をオナペツトして責められ、整っていた髪型はくしゃくしゃに乱れてしまっていた。ぱたぱたと尻尾を振りながら服従の言葉を述べ、嬉しそうに乱れ髪を震わせる。そこには、冷厳な復讐者の面影など少しもない。被虐の恍惚に蕩けきった姿は、あさましい牝犬そのものだった。

「ふふふ、エッチで可愛いよシスフィーナ……もう、立派な牝犬奴隷になれたね。ほら、これはボクからのご褒美だ……受け取ってよ」

「え……る、るひえる？ 何をくれるの……ふああ、あっ!？」

愛する少年に褒められ、思わず頬を緩ませる犬奴隷。心を満たす幸福は、次の瞬間には肉の悦びに塗り潰されていた。溶けそうなほどの切なさが脊髄を流れる——鋭敏な尻尾を、ルシエルに強く握られたのだ。毒々しい赤爪が、銀毛を掻き分けて肉身を抉る。それだけでも気持ちよくてたまらないのに、少年魔神は素早く両手を上下させ、性感帯を強く抜き立ててきた。魔法で生成された急所を可愛がられ、辛いほどの肉悦が湧き上がる。

「あ、あふうううあっ!？ ふあん、それっ、それえ……くうん、す、すごひいい……！」
しゅっ、しゅっしゅっしゅっ！ まるで男根を抜くように、鋭敏な尻尾をリズムカルに翳られる。稲妻のような快感に焼かれ、エルフは腰を突き上げ身悶えた。魔根に貫かれて

いる秘淫はさらに痙攣を増し、粘つく愛液をしぶかせている。愛液に濡れたミニスカートを震わせ、奴隷メイドは尻尾扱きの悦びに乱れ狂った。

「ふふ、どう？ 嬉しいかい、シスフィーナ？」

「え、ええ……くうん！ う、うれひい……るひえるう、わたし、すごふうれひい〜！」
身を焼く犬の法悦に、シスフィーナの顔は蕩けきっていた。汗まみれの顔をペニスに擦られ、さらなる喜悅が湧き上がる。口淫中のペニスが暴れ、舌と内頬を舐られた。さらには、巨根ピストンに膣奥まで蹂躪され、被虐の快感をぶち込まれる。快感神経の塊のような尻尾に爪を突き立てられた瞬間、マゾヒスティックな幸福感が爆発した。

「ふあああ、らめ、それらめえええ！ るひえるうう、すごい、すごいよおお！ ふああ、わたしはイふッ……あああううう、しつぽへえ、イカされるふうううう〜！」

ポニーテールと犬尻尾を同時に震わせ、シスフィーナは再び法悦の声を上げた。くいつと掲げられた秘部から、大量の愛液が噴出する。快楽に届いた牝犬のポーズで麗女が絶頂した瞬間、男たちもまた欲望を解き放った。

「おおつ、また締めつけてきよる……ぬう、ワシも出してやるぞ！ 受け取るがよいわ！」
「うっ……私もだ。ほら餌だ、存分に味わえ！」

どびゆるるる！ どっぽぽぽ！ 麗女を前後から串刺しにしていたペニスが、同時に欲情を炸裂させた。激しいピストンで爛れた粘膜に、熱いマグマが容赦なく擦り込まれて

いく。喉奥でプチまけられた濁流が、口腔内と食道までをも犯し尽くした。前後から叩き込まれた精液が、メイドエルフをさらなる快樂の園へ押し流す。

「はあああああつ、で、出へるうう！ おなかつ、くひもつ、ひああ、んぶううううう〜！」
凄艶な絶頂の最中、犬のように泣き叫ぶシスフィーナ。高く掲げられた股座から、入りきらなかった白濁がぶびゅぶびゅと逆流した。喘ぎ続ける唇からも、涎混じりの精液が垂れ流れる。すでに精液に濡れていた細頸は、またしても白濁に上塗りされた。

「ふふふ、私も出してやる……今度は精液で頭を撫でてやるぞ、牝犬！」

「先ほどのミルクの礼です。遠慮せずに受け取りなさい！」

どばああああ、ぶつしゃああああああ！ 銀髪でオナニーしていた二人も、ほどなく絶頂を迎えた。勢いよく発射された粘濁が、至近距離から頭にぶちまけられる。きらびやかな銀髪を汚濁の白が染め上げ、長いポニーテールの先までが精液で固められた。メイドのブリムは真っ白に染められ、髪を垂れた精液がエプロンのフリルに纏わりつく。

「はあ、んぶああああ……！ 髪つ、髪まで犯されて……はひい、きもひ、いい〜！」

頭頂にぶっかけられた精液は、どろどろと糸を引きながら顎先まで垂れていった。搾りたての精液の熱さが、毛髪を潜り抜けて皮膚を焼く。絶頂の余韻でふるふると震える長耳も、汚れた白に先端まで犯された。ぬるついた蠕動に頭を撫でられ、絶頂感とともに従属の幸福が心を満たす。精液シャワーで銀髪を染め上げられ、飲みきれないほどのミルクを



ご馳走され、お腹の中までいっぱいにされて、シスフィーナは終わらない法悦に酔い痴れた。

エルフの気高さの象徴だったポニーテールは汚れきり、切れ長の碧眼からは随喜の涙が溢れている。スペルマまみれのあさましいイキ顔は、犬の恍惚感に満ち満ちていた。頭からぶっかけられた欲情液は延々と垂れ続け、黒いメイド服を汚れた白に染めていく。

「あ、あふああ……。こんな、いっぱい……う、うれひ、いい……」

尻尾をばたつかせながら、シスフィーナは脱力して床に倒れ込んだ。倒錯した犬奴の幸福に打ちのめされたエルフメイドは、このまま墮ちるしかない。

「あら、ダウンするのは早いわよシスフィーナ？ あなたの仕事は、まだ終わっちゃいな
いんだからね」

真なる主の声が、消えかけた思考に響く。レゼリアの言葉どおり、カルアノス司教はただ全員が満足したわけではないのだ。脱力した麗女に、男たちが群がろうとしたその瞬間。

ホールの扉が、突然開かれた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>